

委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第92巻の表紙写真を募集(テーマ:農業(水利)施設・構造物とそれらに支えられた農地・地域の景観など:現代の最新技術と苦労が垣間見える造形美・用の美など,2023年9月30日締切)したところ、28点の応募がありました。10月30日に審査委員会(委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授)を開催し、12点を選定したので、ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では、学会誌第93巻(2025年発行)も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし、表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は、本誌64ページをご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講評

柳本 尚規(東京造形大学名誉教授)

カメラのシステムが変わって、写真も変わってきているようだ。これにはスマホが大きく関係している。

ファインダーでフレーミングすることがほとんどなくなった。ピントを合わせるという操作がなくなりその概念もなくなった。指先の操作でのばしたり縮めたりするから、望遠や広角といていた概念が拡大と縮小、に変わった。

変化をいろいろ考えていると、どうもいま写真には思いを潜ませる、あるいはその思いを想像させる影のようなものがなくなったのだと思えてくる。望遠は見たい気持ちを実現し象徴にもなった。広角には一点への焦点化を拒む気持ちのやりとりがあった。

もっと大事な変化がたくさんあるが、スマホのカメ

ラ機能はいまや世界をGoogleとAppleの視線に染め上げているという感じではないか。

問題はそういう標準化された映像をどのように活用できるか、どんな必要性から標準化されてきたかを思い起こすことではないか。それが分かれば……というところだが、いまは解放されたその自由をどう味わえばいいのかと、方向を決めめぐねている状況ではあるようだ。

こんなことを書くのも、今回はとくに、もっとけれんみのある写真があってもいいではないかと思ったからだ。物事は正面から見るのではなく斜めから見ないと奥行きが分からないぞと口酸っぱくいわれた記憶がそう思わせるのだと思うが、奥行きの意味でもこのところ見ない凍結や寒風晒しの景観とか、肌にまといつくような湿度の景観とか、北海道や南の島々の景観もぜひ紹介していただきたいと思う。
